

## 西欧人との出会い 470 周年

東光 博英

歴史の教科書には大抵「1543年ポルトガル人の種子島漂着、鉄砲伝来、西欧人の初来日」と書いてある。すると今年は470周年になる。確かに日本ポルトガル（葡萄牙）交流460年の祝賀は2003年、450周年は1993年に行われた。それでは400周年はどうか。意外にも1943年ではなく42年であった。当時の新聞は10月25日に種子島で鉄砲伝来400年の記念祝典が日葡協会会長と種子島の旧領主の子孫を招いて開かれたと報じている（朝日新聞、1942年10月26日朝刊、東京版、2頁）。日葡協会とは前年に発足した日本の友好団体で、その一事業である『日葡叢書』刊行の第1作目に村上直次郎『日本と葡萄牙』を42年4月に上梓した。同書の「後記」に「本年正に400年目に当る種子島葡人漂着の記念事業として」とある。実はポルトガル人の初来日年については1542年と43年の両説があり、100年以上も前から論争されてきた。根本史料はポルトガル人アントニオ・ガルヴァン『新旧発見記』（1563）と文之玄昌『鉄炮記』（1606）であり、来日年を前者は1542年とし、後者は天文12年8月25日（1543年9月23日）とする。他にも重要な史料が複数存在するがどれにも問題があり、それ故に従来様々な解釈を生み確定しなかった。日本では坪井九馬三「鉄砲伝来考」（1892）以来、43年説が普及したとされるが、上述のように太平洋戦争当時は42年説が有力だったようだ。海外では元々42年説が主流のところ、1946年にゲオルグ・シュールハンマーが『鉄炮記』を重視して43年説を提唱してからはこれが定説となった。戦後の日本では恐らく不確定の故に一般には『鉄炮記』に基づき1543年とされたのであろうが、現代の研究者の間では42年説を支持する人が少なくない。しかし近年、日本を含めた東アジア海域の交易に関する研究が進展し、新たな視点と新史料によって従来解釈を吟味することで改めて初来年を1543年とする説が現れている（中島楽章論文、『史淵』142輯）。また諸史料が再検討される中でフェルナン・メ

ンデス・ピント『東洋遍歴記』（1614）の評価が見直されたことは興味深い。同書はポルトガルの文学作品として知られ、著者は最初期に日本を数回訪れたこともある豊富なアジア滞在の経験を基にこの自伝的な旅行記を著した。ところが他人の業績や伝聞を自らの経験のように記し、作品は荒唐無稽な冒険譚に仕立てられたために、出版後は多言語に訳されて広く読まれながら、彼本人は嘘つきの代名詞のごとく扱われ、名前をもじってポルトガル語で「フェルナン、メンテス？ ミント」（フェルナンよ、お前は嘘をつくか？ 嘘をつく）という掛詞ができたほどである。学術的には事実と虚構が交錯する厄介な記録と見なされていたが、最近では文学的な価値のみならず、16世紀海上交易の実相を写しているとして史料的価値も認められてきたのは喜ばしい。ところでこの日欧交渉の始まりに関して忘れられがちなのはスペインではなかろうか。海外進出でポルトガルと鎬を削り地球を西回りでアジアを目指してきた。1543年にどこまで来ていたか。実は同年2月、スペインの艦隊が太平洋を越えてフィリピンに到着していた。メキシコの副王がルイ・ロペス・デ・ヴィリヤローボスを司令官として派遣した艦隊で、植民地建設と太平洋をメキシコに戻る航路の開拓を目的にしていた。その後司令官は艦隊の1隻サン・ファン号をベルナルド・デ・ラ・トーレに託して航路の探索と副王への報告を命じた。こうしてその船は43年8月停泊地を出帆、やがて黒潮に乗ったのか太平洋を日本に向けて北上したが、面白いことに『鉄炮記』の説くポルトガル人が種子島に漂着した日の僅か2日後、即ち9月25日に種子島の近くを通過している。実際には種子島から南方490kmの南・北大東島付近を航行したと見られる。この距離は彼らにとって指呼の間といってよい。もし船が北上を続けていたら日本の沿岸に達したであろうが、そこから東に変針したために小笠原諸島を初めて望見することになった（浦川和男「小笠原諸島発見史」）。結局サン・ファン号は帰路開拓に失敗してフィリピンに戻ったが、以上のように西欧人の日本初来はポルトガルとスペインのいずれでも起り得る状況にあったと言えよう。

とうこう ひろひで(非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史)